

---

## 第 14 章 青年期Ⅲ：1955 年後半～1956 年（18～19 歳）

### アウレフでの無為の日々

アウレフに帰ってはみたものの、当時アウレフには機械工の資格を生かせるような職場はなかった。これといった仕事が見つからないまま数カ月が過ぎた。シェイク・ベイ (Cheikh Bay) のメデルサ (Medersa) に、アラビア語文法を習いに通ったりもしたが、授業は週 3 回、一回 1 時間足らずしかなかった。メデルサでは私の他にアブデルカデル・バカディール (Abderlkader Bakadir) とモハメッド・ハムーダ (Mohammed Hamouda) という生徒がいた。1955 年末の数カ月間、この閉塞感の中で私は少しずつ無気力になって行ったが、それではいけないと、気晴らしに何人かの同じ年頃の女友達と付き合うようになった。中でも特に私の気を引いたのはメサウダという女性だった。私は彼女の家にも足しげく通った。私たちの付き合いは真面目なもので、二人きりで会ったりなど、世間の規範に背くことは決してしなかったが、私達二人の間には段々と互いへの愛情が育まれていった。

このアウレフで逼塞していた時期、コーラン学校時代の恩師ブーカディ師が私のことを心配して、ラムカリア (Lamkahlia) に入団してはどうかと勧めてくれた。彼自身も団の一員だった。ラムカリアとは、地域の男だけで組織する宗教的色彩の強い一種の自衛団で、かつてモロッコの王権が砂漠の辺境地帯において、外敵の侵略に備えるため現地の男たちを集め訓練したことに起源を發する。フランスが北アフリカを征服し、モロッコからアルジェリアを分離した後も、この自衛団の伝統は維持された。団に入れるのは名家の息子や模範的な若者だが、思春期の年齢になって団に加入するのは名誉なことだった。団員は、町が敵に襲われた場合を想定して、武器の扱いや戦闘方法の訓練を行う。タレブの推薦があったので、私の入団は難なく認められた。当時 18 歳でまだナイーブだった私は、この歴史ある自衛団の一員というステータスをたいそう誇らしく感じたものである。なお、この自衛団の訓練については、西ティディケルトの章で詳述するので、そちらをお読み頂きたい。



ラムカリアのメンバー間での符丁 (著者提供)

## インサラーの石油会社へ就職する

結局私は、仕事を探すためアウレフの東の町インサラーへ行くことにした。メサウダと離れるのはつらかったが、アウレフに仕事がない以上仕方がなかった。インサラーでは、CREPS (訳注: サハラ石油探査・採掘会社 [Compagnie de Recherche et d'Exploitation Pétrolières au Sahara]) という石油会社へ行き、現地基地の責任者に面会を申し込んだ。ここのボスはストイックな元軍人で、周りの人々は彼をモンジュヌー大佐と呼んでいた。大佐のオフィスに入ると、彼は、まるで以前からの知り合いを迎えるかのように満面の笑顔で私を迎えた。大佐は現地アクセントの流暢なアラビア語を話した。きっと、ここの責任者になる前は、サハラ駐留のフランス軍部隊に長くいたのだろう。私は直感した。この人は善良な人だと。こういう人の下なら私も自分の力をフルに発揮して働けるに違いない。そのためには、私の持っている技能が、石油産業でも役に立つと精一杯アピールしなければ。一通りの挨拶が済むと、大佐は私に用件を尋ねた。私は、仕事を探してること、コロン・ベシヤールの白衣修道会の職業訓練所で機械工の資格をとったこと等を説明した。大佐は受話器を取り上げ、チッサン (Thissen) さんという地質部の部長としばし話した後、私に言った。「君を地質学部で受け入れようと思う。生憎機械修理の仕事はないが、設計の仕事ならある。おそらく君は、それも訓練所で教わったんじゃないかい？」

私は、その通りだと応えた。なら何も問題ないしだ、そう大佐は言って、一枚の書類に私の名前と年齢を書き込んだ。

「では明日の朝から仕事開始だ。健闘を祈る！」

私は、この言葉を会見終了の合図と見て、礼を述べ、大佐のオフィスを後にした。

翌日私は地質部へ出勤した。チッサンさんは彼のオフィスで私を待っていた。彼は書類を前にして言った。

「この地質部一家へようこそ！初めに言うておくが、ここでは第一に正確さが要求される。」

ミスは許されない。いいね?」

チッサンさんは、部のメンバーを紹介するから付いてくるようにと私に言った。地質部は 4 つのプレハブ小屋に分かれていた。まず、主任のラフォン (Laffont) さんと、彼の 3 人の部下に引き合わされた。

「君の直接の上司は、このラフォンさんだ。彼が休みの時は、私が仕事の指示を与える。さあ、後はラフォンさんが君が毎日何をすればいいか説明してくれるだろう。」

そう言ってチッサンさんは自分のオフィスへ戻って行った。

私は、不転退の覚悟で新しい仕事を覚え、全力を尽くして働いた。その日の仕事は、たとえ残業してでも、その日のうちに終わらせた。そのため一か月も経つと、上の人たちからも一目置かれるようになった。私は、円筒状土壌標本の分析の仕方、記録紙のデータの見方、報告書の複写、メッセージの配達、遠くの工事現場との無線連絡の仕方などを習い、また時には各現場から送られてくる標本を受け取りに空港にも行った。年が明けて 1956 年になった頃には、これらの仕事にはもうだいぶ慣れ、慣れると次はもっと新しいことを覚えたいと思うようになった。チッサンさんは、私のそうした意欲を知り、私を自分のオフィスに呼んだ。彼は私の仕事ぶりを褒めてくれた後こう言った。

「君はこの仕事に興味があるようだね。よくやってくれている。会社には技能向上の研修制度があって、それはフランス本土で行われるのだが、次の機会には君を推薦してあげよう。」この言葉を聞いて、私は、長くこの会社 CREPS で働きたいと思った。

1956 年春のこと、嬉しいニュースが会社に入った。エジェレ (Edjeleh) 地方のティガントゥリン (Tigantourine) で初めて原油が出たのである (訳注: この会社で初めての油田ということ)。第一報から数時間後、原油の標本を載せた特別便の飛行機がインサラールの空港に着いた。私も同僚たちと一緒に、この「新生児」を迎えに空港へ行ったが、まるで何かの祭典のような騒ぎだった。きっと事情を知らない人が見たら、共和国大統領でもやって来るのかと思っただろう。この探鉱の成功により、CREPS は大発展を保證されたのだから無理もない。原油標本は、一部は同日中に直ちにフランスへ送られ、残りは会社の地質部に飾られた。なお、インサラールでは、この「新参者」は町の住民たちにも公開された。この日会社では派手にお祝いが行われたが、従業員にも相当な額のボーナスが支給された。



イメージ画像：アウレフ近郊の油田の試掘跡。失敗だったらしい。（2002 年訳者撮影）

結局私はインサラーで 6 カ月余り暮らしたが、その間一軒の小さな家を借り、掃除、料理、洗濯は自分でした。一方で、飲み水は、ベント・エル・キリ（Bent El-Kiri）という名の婦人を雇い、運んでもらった。水を汲めるフォガラや井戸は、私の家から数百メートルも離れていた。彼女は、水を入れた瓶を腰で支え、長い長い道のりを、毎回せつせと運んでくれた。とても優しい女の人だった。今でも彼女のことはよく覚えている。インサラーでの、自由な鳥のような、気ままな独り暮らしは楽しかったが、毎月末には母たちに会いにアウレフに戻った。当時父は依然ケナドサの炭鉱で働いており、家には母と妹たちだけだった。家へは月末の他、何か宗教的な祝日やお祭りの機会にも帰った。このように頻繁に帰ったのは、もちろん、愛しいメサウダに会いたかったからである。

### ユーゴ先生と再会、農業指導員に転職する

この新しい仕事にも慣れたころ、かつての小学校の恩師、ユーゴ先生が突然インサラーへ現れた。先生は、アウレフを再訪したが、そこに私がいなかったので、わざわざ私に会うためにだけここまで来たというのだ。

「ここで何をしてるんだい？」とユーゴ先生は、再開の挨拶もそこそこに私に尋ねた。

アウレフで仕事がないので、仕方なくこの石油の町に仕事を探しに来たのだと、私は答えた。

「なんてことだ！ここじゃ今はよくても、将来がないよ。」と先生は言い、こうも続けた。

「ここは直ぐ辞めて、トゥグルト (Touggourt) の 70 キロ北のエル・アルフィアンヌ (El Alfiane) にある農業専門家養成所へ行きなさい。そこを出れば、『地方開発のための農業指導員』という資格がもらえる。これは地元の人々から尊敬されている仕事だから、地元の人たちの信頼を得られれば、いずれは選挙にも出られるだろう。」

当時は、生徒が先生の言うことに厭だと言える時代ではなく、その上ユーゴ先生は私にとっては父も同然だった。従って事は決まった。数日後、私は辞表を提出した。地質部のチッサン部長は何が起こったのかといぶかしがり、考え直すようにと私に 3 日間の休暇をくれた。そして休暇明けに私に翻意を求めたが、私は考えを変えなかった。

それから一月後、私はエル・アルフィアンヌの農業専門家養成所にいた。そのころメサウダとの付き合いは既に二年になっていた。私はいつも彼女のことを思っていたが、彼女の方も同じくらい私に愛着を持ってきているかは自信が持てなかった。なお私がインサラーで働いている間に、彼女は重い鬱病に罹ってしまっていた。これは 1956 年のことだったが、彼女の不調は何カ月も続き、徐々に回復はして行ったものの、はかばかしくなかった。一方、養成所では 18 カ月の集中講座を受け、無事試験にも合格し、私は晴れて農業指導員の資格を獲得した。

私はインサラーへ戻り、ティディケルト地方農業局の主任農業技師トゥータン (Toutin) さんの所へ行った。そこで私は西ティディケルトを担当する「地方開発のための農業指導員」に任命された。幸いなことに、常駐するのはアウレフのオフィスだった。上司のトゥータンさんからは、アウレフ郡の中のクグルファ (Cgheurfa)、ティモクテン (Timokten)、アカブリ、ティット (Tit) のナツメヤシ農園を巡回し、定期的に詳細な報告書を提出するよう指示された。これらの集落は比較的水利に恵まれており、私も訪問の折にはその美しさに感嘆したものである。フランス人がティディケルトへ入植した後、フランス人の技師は天性の勘で、インサラーと同じくティットにも古生代の帯水層があり、少し圧力を加えればナツメヤシ農園に導水可能だと見て取った。家畜の牽く荷車で機材が運ばれ、井戸の掘削が行われた。当時の掘削方法はまだ人力によるパーカッションボーリングだった。新しい井戸はふんだんに水を供給してくれた。しかも、フォガラのように浚渫などの維持管理も必要なかった。この水源開発の成功は、フランス人が地元住民の心を掴むのに一役買った。ある者たちは、フランス人はアラブが送った使者だと言い、またある者たちは、フランス人は富と平和をもたらした、しかも彼らは自分たちの宗教を強要したりしない、と言った。地域の族長たちの目にも、フランス人は安定と平和を持ってきたと映ったようである。何故なら、フランスの植民地化以前は、南方からやって来るトゥアレグ族や、北西からの賊の侵入に絶えず晒されていたからである。

このティットのアルトワ (artésien) 式井戸 (訳注: 自噴井戸) は、その後大した故障もなく、40 年以上に渡ってナツメヤシ農園に水を供給し続けた。鉄製のパイプは最後にはボ

ロボロに錆びて穴が開き、噴出した水は四方八方を水浸しにした。あふれ出た水は低い方へ低い方へと流れて行き、窪地まで行って何百メートル四方もある巨大な水溜りを作った。ナツメヤシ農園にはもはや水は行かなくなったが、この突然出現した小さな湖は、秋にヨーロッパからアフリカへ、春はその逆のルートを飛んでいくコウノトリやカモといった渡り鳥の休憩地点となった。1958 年になってやっと水利局は、この最初の井戸を埋め、その脇に新しい井戸を掘ることを決めた。新しい井戸の流量は 3000 リットル/分あった。その翌年、そこから 1 キロ半の所にあるカルナファ (Karnafa) というナツメヤシ農園にも、井戸が一基掘削された。こちらの方の流量は 1500 リットル/分だった。なお、ティットの最初の井戸も 1500 リットル/分ほどの流量だった。これら三例から推測すると、ティットの帯水層の圧力では噴出量 3000 リットル/分が限界のようである。



イメージ画像：バイユード病に感染したナツメヤシ。オアシス農業の要、デーツ栽培の敵。

## 方々のオアシスを回る

私は若く、この仕事へのモチベーションも高かったので、たいそう野心的に仕事に取り組み、前述の 4 つのオアシス集落を毎週一つずつのペースで巡回した。私の仕事は、小規模農家と話し合い、生産性向上のため彼らが何を必要としているかを見つけることだった。また、バイユード (Bayoud) (訳注：根から侵入する菌類の寄生によって、木の内部が粉を吹いたように真っ白になって枯れてしまう。) などのナツメヤシの病気や、病虫害の確認も行った。トゥータン主任技師は、バイユードに耐性を持つティンカルブーシュ (Tinkarbouche) という種のナツメヤシを数千株の規模で導入する計画を作った。ティナクール (Tinaceur) という種もバイユードに強く、寄生されても回復することさえあったが、ティンカルブーシュの耐性は更に強かった。トゥータンさんは自ら、苗の品定めをしにブーダ (Bouda) の町へ行った。しかし、その町の売り手は悪質で、彼を騙そうとする者が多かった。苗の良し悪しは何年も経たないと判明しない。従って、詐欺に会っても、そうと気づくのはずっと後である。時には地元の農民の中にさえ詐欺に会う者があった。最

もたちの悪い売り手は、雄株を売りつけようとする事さえある。トゥータンさんは視察へ出る時よく私を同行させた。ある日、彼は立枯れたナツメヤシを見て、「これはシロアリのせいか」と聞いた。私は、フランス語の名前は知らないが、この土地では、この虫をタルクーフ (talkhoukh) と呼んでいると答えた。彼は怒り、私の腕をとって、そのナツメヤシの木のところまで引っ張って行った。そして、小刀を取り出して木の幹を少し削り取った。樹皮の下でシロアリが蠢いているのが見えた。ほら、「やっぱりそうだ」と彼は言った。私は、上司に口答えしてはいけないと、黙っていた。しかし心の中では、自分の知識が優越していると信じ込んでいる者に、何を言っても無駄だと思っていた。もし、彼が謙虚であったなら、私も、シロアリは枯れた木にだけつくもので、生きた木は襲わないと教えてあげただろうに。